『ひげの文化』

先日テレビでザルツブルグ音楽祭制作の『フィガロの結婚』を見た。

このモーツァルトの人気オペラは私も何度か見たことがあるが、クラウス・グートの演出は人物たちの愛情を抑制しがたい業のようにむきつけに描いて、『フィガロ』のことをもっぱら陽気で楽しい物語だと思っていた観客に衝撃を与えたようだ。コスチュームも男女ともに白と黒だけ。華やかで明るいオペラという印象を裏切っている。

原作はボーマルシェが書いた戯曲。舞台はセビリヤだが、実際は大革命前夜のフランスの腐敗した貴族社会を辛辣に諷刺している。そのため検閲に引っかかり、当初は上演が許されなかったのだから、決してお気楽な話ではない。

声が美しくてつい聞き逃すが、オペラの歌詞も「殿さまの特権」（初夜権のこと）とか「娘たちが汚されぬままに嫁ぐ」とか、さりげなく、かなり不穏なことを言っている。

とすれば、上演禁止になるほどの毒にも気づかず、もっぱら明るい喜劇だとばかり思い込んでこのオペラを愛した二十世紀の読みが浅すぎたとも言えそうだ。

それはそうとして、主人公フィガロの職業は理髪師ということになっている。物語が前作『セビリヤの理髪師』（オペラはロッシーニ作曲）の後日談だから当然そうなるのだが、なぜ理髪師が貴族の館に住んでいるのか疑問に思った方はいないだろうか。

まず、正確には彼は理髪師ではない。バルビエ、つまりひげ師である。

昔のヨーロッパの男性はひげに大変なこだわりを持っていた。女性が化粧と髪型にかけるエネルギーを、男性はすべてひげに投入していたと言ってもいい。ものの本で「バルブ（ひげ）」をひもとくと、絵入りで頬ひげ、顎ひげ、チョビひげと、じつに多種多様。ひげの生え方には個人差があるから、これを本人に似合うようにデザインして上手にカットする職人は、

『ひげの文化』

往時のおしゃれな貴族の男性にとってはなくてはならぬ人材だった。

しかも男性のひげは毎日手入れが必要である。今でも、前日のズボンを平気ではく人だって、ひげは毎朝剃るではないか。

そんなわけで専属のひげ師には休日がなかった。いっそ自宅に住まわせて、身の回りの世話もしてくれればもっと重宝だ。それがまさにフィガロである。

彼らひげ師たちは権力者の耳のごく近くにいるから、何かを「お耳に入れたい」時、とても役に立つ。その特権的な立場を利用して、私腹を肥やしたひげ師も当然あったはずである。ひげは、ある意味、とても貴族的な文化なのである。

ところで日本にはこういうひげの慣習は存在しなかったのだろうか。最近はカリスマ美容師などと世にもてはやされる職種もあるし、男性も女性と同じようにヘアスタイルを気にして、理髪店ならぬ美容院に行くらしい。そこで、今の日本にはひげ専門のデザイナーがいるかどうか、行きつけの美容院で聞いてみた。その返事では、男性の美容師は多いけれども、ひげ専門の人というのは聞いたことがないということだった。

職業が成立しないのは、それを求める人がいないからだ。日本の男性がひげにあまり関心を示さなかったのはなぜだろう。

本文初出：北国新聞「北風抄」二〇〇八年五月一九日
ホームページ掲載：二〇二四年二月二三日